

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 光岡 寿郎

本論文は、「ミュージアムコミュニケーション」という輪郭の不明確な概念を、1910年代から蓄積されてきたミュージアム研究の拡がりのなかであらためて検討し、新たなツールとして設定し直す意欲的な試みである。博物館学における「来館者／オーディエンス」論においても、デジタル技術の「双方向性」に期待をかける教育学的・認知心理学的な研究においても、ミュージアムでのコミュニケーション活動を把握することに新たな期待がかけられつつある。そのなかで光岡氏は、コミュニケーションを人と人との間での情報や知識の伝達現象というより、それぞれの主体が、ある場を共有しつつ意味を「生成」していく行為と捉える。そして「ミュージアム」という場に存する身体が展示物や空間や多様なインターフェースを介して「コミュニケーション」する現象をミュージアムコミュニケーションと捉え、それを観察し記述するための方法論的な枠組みを検討していく。その意味で、光岡氏のこの概念は、独自の理論枠組みを内包すると同時に、分析の対象でもあるものを提示する装置である。

第一章での全体構造の概観のあと、第二章では1920年代から30年代にかけての北米のミュージアム研究が、来館者の疲労や行動の計測といった心理学的な観察のなかで「展示の効率性」という主題を生みだしたことに注目する。第三章は、1950～60年代のメディア論的な関心の高まりに光をあてる。テレビがミュージアムを歴史や自然科学の教育コンテンツとして取り上げ始める過程をたどり、コンピュータが可能にした博物館のデータ処理の効率や省スペース化への期待を論じている。ラジオからコンピュータまでメディアが媒介する想像力のなかでの、コミュニケーションへの関心そのものの変化を浮かびあがらせていく。第四章では、ダンカン・キャメロンをはじめとする欧米の研究者の諸概念や調査手法を分析して、ミュージアムが「コミュニケーションシステム」であることを提示しつつ、法整備のなかで社会教育施設化が進み、来館者研究の手法が教育学的な行動主義に規格化されていったことを指摘する。第五章では、「学習」に収斂していく行動主義を組み替え、エスノグラフィー的手法を導入しつつ理論枠組みを構築しようとしたフーパー＝グリーンヒルの議論を「メディア論的転回」として位置づけ、第六章では、加速度的に発達するテクノロジーが可能にした双方向性を背景に、能動的な「選択する来館者」概念が力をもつ現象を指摘すると同時に、その内容の平板さを批判する。第七章は結論の前提となる「メディアコンプレックス」としてのミュージアム理解をイギリスの文化研究を下敷きに論じ、最後にミュージアムコミュニケーション概念の、方法としての可能性を提示している。

文化資源学としての更なる洗練と展開を期待したいが、歴史としてもあまり十分に語られたことのない博物館研究を独自の視点から整理し、新たな理論枠組みと方法とを提示した本論文は、本専攻の成果の一つである。本審査委員会は、博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものであると判断した。